

地域とともに築く新しい挑戦の場。



2021年より使用していた亀岡市のグラウンドを拡張し、甲子園球場とほぼ同じ大きさに整備された「KAMEOKA OTANI STADIUM」。

昨年からの改修工事が行われていましたが、今春ついに高校野球屈指の練習環境と美しさを誇る本格的な球場へと生まれ変わりました。これは、長年にわたる関係者の尽力と、地域住民の応援の声があったからこそ実現できたことでもあります。



前日から大雨で水を含んだ芝生の水抜き作業を行う野球部のメンバーたち



当日は、生徒会や野球部が協力して設営や受付、アナウンスなどを担当



早朝の受付開始とともに、関係者や野球部OB・OG、保護者や地域住民の方々が続々と来場し、新しいスタジアムの門出を祝いました。

未来に託された、多くの人々の想い。

開場式典は乾文雄学校長の導師による勤行からスタート。列席者も静かに合掌し、グラウンドが厳かな空気に包まれます。



列席者の声も重なり、グラウンドに読経が響きわたるなか、生徒たちも真剣なまなざしでその時間を見守っていました。



「これから地域の人との関係をより深めていきたい」と話す木越理事長

列席者の挨拶では、新球場の立ち上げに長年携わってきた木越渉理事長（学校法人真宗大谷学園）が、同じ真宗大谷派関係学校である帯広大谷高校が甲子園に出場した際に選手宣誓で述べた「すべての命に生かされている重みを感じながら試合をする」という言葉を紹介。

「大谷高校も同じ思いを持ち、地元で愛されるチーム、学校になってほしい」と話すと、その言葉を受けた桂川孝裕亀岡市長からは、「亀岡を選んでいただいたことをうれしく思います。この場所が、人生の大きな発展のきっかけになることを願っています」と、歓迎の言葉をいただきました。



野球部への期待とともに、お祝いの言葉を述べる桂川亀岡市長

大谷高校野球部、龍谷大学野球部の監督を歴任し、現在は大谷高等学校野球部OB・OG会の代表を務める榎木寛さんは、「ここに新しいスタジアムが作られると聞いたとき、甲子園も夢じゃないと思った」と野球部の悲願でもある球場の完成を喜び、「やればできる、夢は叶う、練習は嘘をつかない」と力強い言葉で挨拶を締めくくりました。



昭和40年、第37回センバツ出場時の思い出のユニフォームを着て式典に参加した榎木寛さん

最後に、亀岡大谷スタジアムの建設を見守り、応援してくれた関係者や地元の方たちへ感謝を述べた乾校長。

この日招待した小松大谷高校の西校長先生とのお話を通して持つに至ったという、新たな夢について語られました。それは、いつか京都と小松の大谷同士で、優勝旗をかけて甲子園で競い合う姿を見ること。

また、先日能登へ訪問したことに触れ、「こうして野球ができることは、実は当たり前のことじゃない。だからこそ、その喜びを遠慮することなく楽しんでほしい」と、大きな目標へ向けて踏み出す生徒たちへエールを送りました。



尊敬するキング牧師の言葉「I have a dream」を用い、I will.....と続く夢について語る
乾学校長



新しいスタジアムの完成を祝い、テープカットが行われた

スタートを告げる始球式と親善試合。

式典が終わる頃には晴れ間も見えはじめ、小松大谷高校と大谷高校との開場を記念した親善試合がスタート。



2024年夏の甲子園に出場した小松大谷高校野球部のメンバーたち

記念すべき初戦の始球式には、横浜DeNAベイスターズで投手として活躍した大谷高等学校野球部OBの福田岳洋さんが登場。まっさらなマウンドに立ち一礼すると、力のあるボールをストライクゾーンに投げ、スタンドからは大きな拍手が沸き起こりました。



大きな舞台でマウンドに立つのは2013年の引退以来だったという福田さん

場内インタビューでは、現在埼玉西武ライオンズのパフォーマンスアナリストとして新しいかたちでプロ野球に携わっている福田さんから、後輩たちへ向けた心強いメッセージも。

「僕は高校時代、野球をすごく頑張っていましたが、正直その3年間で大きな成果があったわけではありません。でも、大谷高校で勉強も部活も頑張ったことが、のちの大学生活やプロ野球、そして今の仕事に続いています。今しっかり頑張ることももちろん大事ですが、人生はまだまだ長いので、継続して頑張れる目標をここにいる間に見つけることが、これから先のいい人生につながっていくと思います」(福田さん)



引退後も大学院でスポーツ科学を学ぶなど、野球を通して常に新しい道を切り拓いている





甲子園と同じ黒土と天然芝を備えた球場で、のびのびとプレーするメンバーたち

新しいグラウンドを力強く駆け回る生徒たちの姿を、頼もしく誇らしげな表情で見守る観客や家族、地元住民たち。

多くの希望と期待を背負って誕生したこの場所から、大谷中学・高等学校の新たな歴史が始まっていきます。

Text: Asako Saimura

Photo: Michiko Wakabayashi
